参考資料　1

平成 25 年度 第２回狩猟鳥獣のモニタリングのあり方検討会
委員指摘事項と対応方針

〇平成 25 年 11 月 8 日（金）14:00 ～ 16:00　（一財）自然環境研究センター　７階　会議室

【議事１】

ウズラの繁殖期におけるモニタリング手法（マニュアル）の修正案について

尾崎	〇調査目的に応じた距離設定の考え方も加味すべきである。モニタリングのための調査の統一的なマニュアルならば、最初に設定した場所や距離設定は変えるべきではない。 →　現時点では、全国的な生息情報の蓄積を優先し、幅広く調査が実施されるよう、距離設定は固定しない。距離設定の参考として、試行調査で用いた距離（200 m）を提示し、使用機器の性能や等を考慮して設定する旨を記述。
川路	〇EU の文献にある農家の方に協力いただく調査方法も、事務局側が勝手に判断して外さない方が良いのではないか。 〇ルートセンサスの調査票も掲載した方がよい。また、マニュアル 9 ページの真ん中の下の「誘因効果」の表記は「誘引効果」の間違いなのではないか。 〇北海道を想定して「他のところでは注意して活用ください」と記述してしまうと、北海道以外の自治体はやらなくてもよいと受け取ってしまう可能性がある。 〇北海道でのみ実施された場合、本州でウズラが回復していても、そのモニタリングが実施されないこととなる。それを防ぐ意味でも全国規模での実施を視野に入れるべき。 →　それぞれ指摘に沿ってマニュアル案に反映。
尾崎	〇ウズラが鳴いた位置が、GPS に記録した位置から見てどの方向、どの程度の距離だったのかを調査票に書き込むようにすべき。 〇調査票の備考欄は例示があった方がよい。例えば目視したとか、ヒナを見たとか、個体確認の確実性や繁殖情報やヒナの出没時期がいつ頃であるといったことの蓄積が可能となる。 →　調査票に、ご指摘の情報を書き込む項目を設ける。また、これらの情報の記載例を表示。
橘	調査を実施したが生息は確認できなかったというデータが重要となるのではないか。 →　生息が確認出来なかった場合も、その旨を記録すべきとの内容に修正。

【議事２】

ウズラ・ヤマシギのモニタリングに係る試行調査（非繁殖期）手法について

〇ウズラについて

川路	非繁殖期の調査マニュアルを作る場合は、風の強さや風向きなどの条件が重要になるだろう。
橘	試行調査時の調査実施距離にばらつきがみられる点について、今後実施する試行でより効率的で適正な距離の目安を探ると良いかも知れない。できれば、調査距離は長く、さらに回数を増やせるのならばよりよいだろう。

→　今年度の試行調査の結果及び調査協力いただいたハンターへのヒアリング結果（資料３）に基づき、ご指摘の事項をマニュアルに記載。

【議事３】

ヤマドリのモニタリングに係る調査状況について

川路	〇ヤマドリに関する情報として、以下の様な情報もモニタリングの参考になる。 ・　ヤマドリを捕れる人がどれぐらいいるのか ・　どのような狩猟方法を行っているのか。 ・　常に通っている主要な猟場でもヤマドリが少なくなったり、いなくなってしまったりした場合は、場所を変えるのか。 〇今回のアンケート自体は、自治体がどのように調査を実施しているのかと言うことを把握する意味では意義があった。別途、調査員自体のアンケートも必要ではないか。 **→　調査員へのヒアリングを実施（資料５）。**
川路	〇出合数調査について、ヤマドリを狙って鳥猟用の猟犬を連れて実施する場合と犬無しでシカを撃つついでに実施する場合では明らかに調査結果の精度にばらつきが出てしまうだろう。 〇現状を踏まえて出合数調査を今後どうすべきか。新たな手法を示して実施してもらえるようにすることを進めたいが、強制は難しいのだろう。 〇初猟日の調査で出合がなく、他の日や場所で出合えたデータがある場合そちらの方が重要だろう。 〇初猟日の出合数調査で一番貴重なのはメスの生息数のデータである。実際に出合数のデータが多いところの調査手法の実態調査が必要かもしれない。 **→　地域別の集計等により、出合数調査結果の活用について検討（資料６）。**